

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私は、その男の写真を三葉^(注1)、見たことがある。

一葉は、その男の、幼年時代、とても言うべきであろうか、十歳前後かと推定される頃の写真であって、その子供が大勢の女のひとに取りかこまれ、(それは、その子供の姉たち、妹たち、それから、従姉妹たちかと想像される)庭園の池のほとりに、荒い縞の袴^{はかま}をはいて立ち、首を三十度ほど左に傾け、醜く笑っている写真である。醜く？ けれども、鈍い人たち(つまり、美醜などに関心を持たぬ人たち)は、面白くも何とも無いような顔をして、

「可愛い坊ちゃんですね」

といい加減なお世辞を言っても、まんざら空^{から}お世辞に聞えないくらいの、謂^いわば通俗の「可愛らしさ」みたいな影もその子供の笑顔に無いわけではないのだが、しかし、いささかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひとめ見てすぐ、

「なんて、いやな子供だ」

と頗^{すこぶ}る不快そうに呟^{つぶや}き、毛虫でも払いのける時のような手つきで、その写真をほうり投げるかも知れない。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何とも知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。どだい、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはいないのだ。その証拠には、この子は、両方のこぶしを固く握って立っている。人間は、こぶしを固く握りながら笑えるものではないのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔に醜^{しわ}い皺^{しわ}を寄せているだけなのである。「皺くちや坊ちゃん」とでも言いたくなるくらいの、まことに奇妙な、そうして、どこかけがらわしく、へんにひとをムカムカさせる表情の写真であった。私はこれまで、こんな不思議な表情の子供を見た事が、いちども無かった。

第二葉の写真の顔は、これはまた、びっくりするくらいひどく変^{へん}貌^{ぼう}していた。学生の姿である。高等学校時代の写真か、大学時代の写真か、はつきりしないけれども、とにかく、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、不思議にも、生きている人間の感じはしなかった。学生服を着て、胸のポケットから白^(注2)いハンケチを覗^{のぞ}かせ、籐^{とう}椅子^{いす}に腰かけて足を組み、そうして、やはり、笑っている。こんどの笑顔は、皺^{しわ}くちやの猿の笑いではなく、かなり巧みな微笑になっはいるが、しかし、人間の笑いと、どこやら違う。血の重さ、とても言おうか、生命の渋さ、とても言おうか、そのような充実感は少しも無く、それこそ、鳥のようではなく、羽毛のように軽く、ただ白紙一枚、そうして、笑っている。つまり、一から十まで造り物の感じなのである。キザと言っても足りない。軽薄と言っても足りない。ニヤケと言っても足りない。おしゃれと言っても、もちろん足りない。しかも、よく見ていると、やはりこの美貌の学生にも、どこか怪談じみた気味悪いものが感ぜられて来るのである。私はこれまで、こんな不思議な美貌の青年を見た事が、いちども無かった。

もう一葉の写真は、最も奇怪なものである。まるでもう、としの頃がわからない。頭はいくぶん白髪のようにである。それが、ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちていた）、その写真にハッキリ写っている）の片隅で、小さい火鉢に両手をかざし、こんどは笑っていない。どんな表情も無い。謂わば、坐って火鉢に両手をかざしながら、自然に死んでいるような、まことにいまわしい、不吉なおいのする写真であった。奇怪なのは、それだけでない。その写真には、わりに顔が大きく写っていたので、私は、つくづくその顔の構造を調べる事が出来たのであるが、額は平凡、額の皺も平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻も口も顎も、ああ、この顔には表情が無いばかりか、印象さえ無い。特徴が無いのだ。たとえば、私がこの写真を見て、眼をつぶる。既に私はこの顔を忘れていた。部屋の壁や、小さい火鉢は思い出す事が出来るけれども、その部屋の主人公の顔の印象は、すつと霧消して、どうしても思い出せない。画にならない顔である。漫画にも何もならない顔である。眼をひらく。あ、こんな顔だったのか、思い出した、というようなよろこびさえ無い。極端な言い方をすれば、眼をひらいてその写真を再び見ても、思い出せない。そうして、ただもう不愉快、イライラして、つい眼をそむけたくなる。

所謂「死相」というものによって、もっと何か表情なり印象なりがあるものだろうに、人間のからだに駄馬(注3)の首でもくつつけたなら、こんな感じのものになるであろうか、とにかく、どこという事なく、見る者をして、ぞつとさせ、いやな気持ちにさせるのだ。私はこれまで、こんな不謹慎な男の顔を見た事が、やはり、いちども無かった。

(太宰治『人間失格』による)

(注1) 三葉 (さんよう) ……三枚 (注2) ハンケチ ……ハンカチ

(注3) 駄馬 (だば) ……荷物を運ぶ馬。あるいは、下等な馬。

	いつ頃の写真ですか	どんな写真ですか
一葉		
二葉		
三葉	としの頃がわからない	

問一 三葉(さんよう) (三枚) の写真について、文章中の言葉を使って、左の表を完成させなさい。

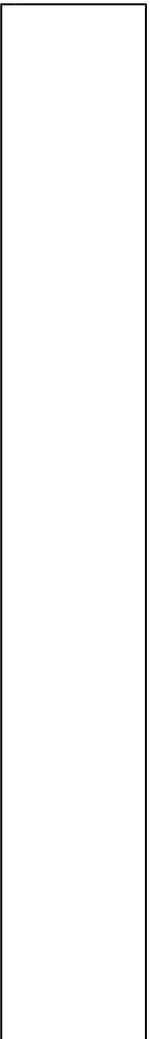
問一 書き手が、三葉の写真を並べることでどんな効果を生み出しているのか、グループで話し合いました。話し合いの内容を参考に空欄に入る内容を考え書きなさい。

生徒A…三葉の写真はそれぞれ、ぞつとさせるような不思議な顔が写っているんだね。

生徒B…しかもさ、成長によって、不気味さはどんどん変化していつているみたいだね。なぜ、「その男」は、こんな表情なのだろう。なぜ、「その男」の表情はこんなに変化してしまったのだろうかという疑問がわいてきたよ。

生徒A…三葉の写真を並べてみることで、作品の中ではほかにどんな効果があったんだろう。

あなた…



という効果を生み出しているんだと思うよ。

《解答例》

問一

	いつ頃の写真ですか	どんな写真ですか
一葉	幼年時代	顔に醜い皺を寄せているだけのサルの笑顔 へんにひとをムカムカさせる表情
二葉	高等学校時代か大学時代	おそろしく美貌だが、一から十まで造り物の笑顔 どこか怪談じみた気味の悪いものが感じられる
三葉	としの頃がわからない	表情が無いばかりか印象さえ無く、特徴がない 最も奇怪

《評価のポイント》

- ◎ 「どんな写真ですか」に対して二つ以上書き抜いている
- 「どんな写真ですか」に対して一つ書き抜いている

問二

<ul style="list-style-type: none"> ・「その男」の生い立ちを一層知りたくなる ・「その男」について、どんな人物なのか、もっと知りたいと思わせる
--

《解説》

太宰治『人間失格』のこの冒頭の文章は、とても有名だ。

この後、他人の前では面白おかしくおどけてみせるばかりで、本当の自分を誰にもさらけ出す事の出来ない男の半生が手記というかたちで描かれる。

へ私は、その男の写真を三葉、見たことがあると、「どんな写真なのだろう」と読者の興味をかきたてる。しかし、三葉の写真はどれも不気味で、不思議なものばかりだ。読者は、その意外性に驚き、「その男」のことが知りたくなる。

また、三葉の写真は、幼少時代・学生時代・大人（年齢不明だが）とそれぞれの年齢で写されているが、そこに写った表情はそれぞれ不気味さや不思議さが異なる。読者は、「その男」はどのような人生を歩んだのだろうかということも同時に知りたくなる。

つまり、三葉の写真を提示することで、読者に「その男」自身や「その男」の半生に興味をいだかせる効果を書き手はねらっている。